

漢字教育における向山実践群の意義に関する検討
「覚える学習」から「考える学習」への転換期に求められる向山実践群の特長

板倉 弘幸
Itakura Hiroyuki

要旨

漢字指導に関する教材開発では、向山氏の下で多くを学んできた。なかでもコンピュータのコンテンツ教材とあかねこ漢字スキル教材の開発を進める上で、多数の文献調査等を行い、会議や制作に臨んだ。実際にそれらを授業で活用することで、漢字教育や漢字指導に関する向山実践の有意性を実感することができた。しかし、これまでの一般的な漢字指導は主に、如何にして漢字を習得させるかという「覚える学習」に重点があった。ところが近年の様々な漢字教育に関する知見に触れる機会があり、“漢字は「覚える学習」から「考える学習」への転換を”という内容を知り得た。その捉え方には興味を引かれるものがあり、ならば両者の次の段階として「使える学習」の場面も必要ではないかと考え、改めて向山実践群の特長について調査・分析をすることにした。

キーワード：漢字スキル、ゆび書き、漢字文化、使える学習

I. テーマの用語を定義する

定義には例えば、辞書の見出し語と意味の記述関係のような「辞書的定義」、また「私は○について～と定める」と宣言してしまう「規約的・約定的定義」がある。後者は一つの学問領域内での用語の意味を自分たちで限定するという定義である。向山氏が「定義は自分たちで決めればよい」とよく話されるのは、後者の意味であることが分かる。

以下に述べる用語は、定義というより取り上げる範囲という意味で述べている。

1. 漢字教育の範囲

田中久直は、1971 年、漢字の習得量主義からの脱皮を主張した。

漢字指導には書写的指導と語句的指導の二面性があること。前者は漢字を正しく書けることを目指し、後者は正しく使えることを目指す指導であり、これらは指導体系が別であることを論じた。

習得量を考慮する際には指導法だけでなく、漢字の字数制限も対象となる。つまり、漢字の習得のための負担を減らすには、小中学校で扱う常用漢字の数を制限すべきという考えであり、いわば国語国字問題と連なる。しかし、本論では、この件については扱っていない。指導法という面からいくつかの観点で分析している。

2. 向山実践の内容

向山氏が開発した「あかねこ漢字スキル」だけでなく、その開発以前に授業で実践した漢字の成り立ちやテストの実践、口に二画を足しての漢字づくりなどのパズルやゲームの類、さらにはスキル教材の開発途上で企画された漢字全部くんや総まとめくんなども向山実践の内容に含めた。さらには、「漢字文化の授業」なども含め、必要に応じて漢字教育に関連する言語教育などにも触れた。

Ⅱ. 向山実践群の内容

向山氏の漢字教育における主要な提案は、1988 年あかねこ漢字スキルの教材開発、2001 年に漢字文化の授業、そして 2002 年漢字の学習構造改革セミナーにある。

向山氏は 1968 年新卒なので、漢字スキル開発までの 20 年間の漢字指導に関する向山実践も着目した。そのため、『向山洋一年齢別実践記録集』全 24 巻（1967～1985）を調べた。下記のように、全 24 巻のうち実に半分の巻で漢字教育の実践が記述されていた。とくに第 20 巻のアチャラには 10 枚の号に散見されている。

全 24 巻中、漢字指導類のリストと内容の一部は次の通りである。

- 1 巻（1967） 田園調布小の教育実習（熟語作り、残雪の国語試験）
- 5 巻（1972） 5 年国語科オリジナルプリントテスト（詩）（学年末試験）
- 6 巻（1972） 4 年アンバランス（授業参観案内で漢字テストや文の作り方）
- 7 巻（1973） 5 年エトランゼ（忘れ物項目に漢字プリント、漢字ノート、漢字マス帳面）
- 9 巻（1975） 5 年エトセトラ（漢字テストは手を抜かずに。車偏の文字創作を宿題）
- 10 巻（1977） 6 年エトセトラ（E 児の漢字テスト変容のドラマ、漢字パズル、四字熟語）
- 12 巻（1977） 5 年スナイパー（問題 1 漢・和・辞・典の四つの部首名は何か）
- 13 巻（1978） 6 年スナイパー（文章指導、漢字やことばづかいが正確なこと）
- 15 巻（1979/80） 通信四年生（漢字テスト四回、予告。ドリルは毎日繰り返す練習）
- 16 巻（1980） 国語テキスト・日本語の性質（1973）、国語ノート（パズルロに二画など）
- 17 巻（1981） 5 年ランダム（漢字テスト 1 学期の復習 50 問、四字熟語の授業）
- 20 巻（1982） 4 年アチャラ（辞書で説明、春夏秋冬に木偏、重い口、車偏の字）

さらに 86 年創刊の「教室ツーウェイ」の特集を 87 年度と併せて調べてみた。

楽しく学べる漢字授業、ファックス漢字教材、漢字パズルなどを掲載。とくに 87～88 年の 2 年間は岩佐勝弥氏が「楽しい漢字教室」を連載していた。

このようにしてみると、向山氏は漢字教育に関しては、教育実習生の時代からずっと自身が手掛けるべき仕事のひとつとして一貫して存在していたことが分かる。

向山実践には漢字教育の一環として次のような実践群が存在し、それらの着目すべき特長を本論で述べたり、触れたりする。向山実践群の主な特長とは例えば次のようである。

一つは、漢字の習得、漢字文化（成り立ち・字源）、漢字学習法の改革である。

二つに、あかねこ漢字スキルによる練習法は他社にない際立つ特色をもつ。

三つに、漢字文化の授業は、漢字の読み書きだけでなく、成り立ち、意味、哲学を積極的に加えようとした知的な授業の創造である。

四つに「全学年漢字ぜんぶくん」などによる、漢字に興味をもたせ、意欲的に取り組む姿勢を育む（パズルやクイズ、ゲーム化も含む）実践である。

五つに、向山氏が授業化した辞書活用や熟語づくりなども含む言語指導の実践である。

Ⅲ. これまでの漢字指導と向山実践

1. 我が国の漢字指導

国語教育方法論の研究では、漢字教育・指導の文献はあまり取り上げられていない。

『続・国語教育方法論史』巻末に 120 ページにわたる戦後国語教育史年表があり、そこに

「主なる国語教育関係図書」の欄がある。12 ページ目の 108 冊目にやっと滑川道夫『漢字指導の問題点』S26 が登場する。その後の S61 年までの 40 年間全体でも 13 冊しか「漢字」という表現が出てこない。本巻の主張が国語授業論の考察にあったためであろうか。

『近代国語教育史』でも漢字の用語は国語国字問題としての「漢字制限」で出ているのみで、その他言語教育と言語活動の用語もあるが、漢字の内容ではない。

また、『新しい国語科指導法の創造』には 20 の国語指導の流派が紹介されているが、漢字指導についての言及は一つもない。

さらに『講座・日本の学力 6 言語・数』には「漢字指導の研究は、戦後の国語教育研究の歩みのなかで、他の領域にくらべて比較的遅れていた。」と記された。また摘録すると当時の国語教育思潮の中では漢字の研究はおろそかになりがちで、漢字論、文字論の発想からの体系を捉えず、漢字練習帳の類を繰り返し練習する状況であった。この状況に一石を投じたのが、1952 年朝日新聞報道の石井方式の実験的指導であると書かれている。

※石井勲は、幼児の漢字教育も可能であることを実証したが、大村はまは石井方式の授業を 1960 年頃参観していた。その時の印象は「たいへん寒々した思いを覚えている」とのことであった。これは石井方式が問題であるというよりも、授業技量の問題ではないだろうか。向山実践の「漢字文化の授業」であれば、また別の感想をもったであろう。

一方、手元にある次の三氏の研究書・論稿で、我が国の漢字教育や指導法、その変遷を詳細に知ることができた。

①佐藤喜代治編『漢字講座 12 漢字教育』（明治書院）小林一仁論文「漢字教育の歴史」

②福沢周亮『漢字の読字学習～その教育心理学的研究』（學燈社）の「国語教育における問題を通して」

③『日本語学』誌（明治書院）の千々岩弘一論文「国語科教育における漢字指導の共有点とその源流」と『国語教育研究大辞典』の見出し語「漢字指導上の諸問題」

小林・千々岩氏の論文は、明治からの指導法、福沢氏は戦後からの指導法に詳しい。

また千々岩氏は論稿で、これまでの指導方法に関する共有点を、次のように列挙した。

（＊文献 8）現代の指導法がこれらに準じていることが分かる。

- a 漢字の構成要素に着目した分解的、体系的指導法
- b 字源に着目した指導法
- c 遊戯的指導法（パズル、口唱法など）
- d 正書法を前提とした「自然習得の原理」を生かした指導法
- e 語彙指導と重ねた指導法
- f 表記指導と関連させた修辭的指導法

さらに、次の文献や資料も本論文をまとめるにあたり参考にした。

後藤朝太郎（1912）『教育上より見たる明治の漢字』宝文館

皆川長男（1939）『国語読本漢字指導とその体系』厚生閣

堀田龍也ほか「小学校教員の各漢字指導法の指導頻度と児童の漢字の読み書きの正答率の関係」2015 日本教育工学会研究報告書（ネット資料）

2. 中国の漢字教育

向山氏は日本だけでなく、漢字の老家中国の教育にまで、目くばりしている。

①上海実験学校での実践が 2002 年の教室ツーウェイに紹介された。特集「漢字学習の構

造をどう変えるか」で、中国の実際の漢字教育を本誌に掲載した。論稿テーマは「新しい漢字認識教育法～中国の小学校はどのようにして3か月で1500字を学ばせるか～」であった。その論稿で上海実験学校は「コンピュータによる漢字教育法」を提案する。

李氏によれば、中国の漢字指導法には、a 字形中心の集中識字・字族文識字指導法、b 読み重視の分散識字・注音識字指導法、c 活動中心の全方位識字・字理識字指導法の三つに大別できるという。これらは指導の重点は異なるが漢字の構成上の規則性や形音義の特長を生かしており、学習者の興味や関心を喚起させている。内容の詳細を読むと、日本の指導法と共通する部分も多数あった。これらは、1960年～2000年代の指導法であり、このような指導法を経て、実験学校の指導法が誕生したといえる。

②それ以前に向山氏が目にしていた本があった。『中国の小学生はどう中国語を覚えるか』（1998）で、北京師範大学で外国留学生に中国語を教える教師・李凌燕氏が、わが子をモデルにして書いた本である。その本の第2章「漢字を覚える」の冒頭には、中国の小学生は2500もの漢字を覚える、との小見出しがある。

興味深いのは、漢字を覚えるのに最適な方法として、ゲームやなぞなぞを母親目線で行っているところだ。中国でも子供たちが好んで取り組んでいることが分かった。

③加藤幸次氏の『中国の漢字教育～小学校1、2年で1800字を学ぶ子どもたち～』

（2011）を最近見付けた。中国の漢字教育が日本の漢字教育のヒントになればと企画を立ててから、10年間近くをかけてまとめた貴重な研究書である。執筆にあたり基本書として『課程標準（学習指導要領）』や北京師範大学の小学校教科書『語文』などを参考・分析し、中国、台湾、香港など各地での小学校授業見学もされた。さらに中国から日本の大学院に留学してきた元小学校教師二人が執筆協力しているという本格的な研究書である。

本書は、第Ⅰ部漢字教育の全体像、第Ⅱ部漢字指導の具体像で構成され、どの内容も貴重な資料となっている。この本でとくに印象深い内容があった。

加藤氏の考察によれば、小学校の漢字教育の全体は「三つの段階、三つの流れ」の組合せで構成されているという。段階とは低中高学年という発達段階であり、流れとは、「識字活動（漢字の読み書き）、漢字文化の理解、コミュニケーション能力の育成」という指導領域の流れである。

この三つの流れは我が国における漢字指導の原理と同様である、と私は考えた。

次節で述べるが、滑川道夫が1940年に発表した文字教育の実践で提案した漢字習得の三つの原理（練習・興味・表現）そのものである。さらに、向山実践におけるあかねこ漢字スキル練習、漢字文化・漢字パズルの授業、日記や討論・評論文等がそれに匹敵する。

3. 向山氏の漢字指導の原理

①漢字習得の基本は「練習、興味、表現」の中で覚えさせること、とは滑川の主張だ。

漢字の提出は、国語の教科書では計画的にできず、算数の様に積み重ねができない。それで、別の練習帳が必要になる。それが漢字ドリルや漢字スキルの類となる。

②向山氏の漢字指導

年齢別実践記録集などの著作をもとに、向山氏の漢字指導の心得を調べた。キーセンテンスを選んで、以下に並べる。

1972年：漢字はどうしても覚えさせなければダメなので、強引にでもやらせます。

1975年：練習すればできるようになる事は、必ず手を抜かないように。

1977 年：厳しい上にも厳しく採点する。練習すればできる。

1979 年：練習は何文字でもよい。次のテストで満点をとれる自信がつけば、1 回でもよい

1982 年：1 行くらいで覚えるまで。覚えるまで練習しなさい。

向山氏はこのように練習を強調していたが、どれだけの練習が行われていたか。1977・78 年調布大塚小向山学級四代目の卒業生名取伸子氏の国語ノートからは、5 年生後半のノート 39 ページのうち漢字練習に 33%、漢字テストに 26% 占めていることを伴一孝氏は発見し、また吉武徹也氏は、別の国語ノートに同様に 4 割が漢字練習・テストにあてられたことを分析した。こうしたことからノート練習量は多かったことが伺える。

上記の文献には、テストの仕方などは示されているが、次章で述べる漢字スキルで用いる用語（指書き、なぞり書き、写し書き）などは登場していない。

ただ実際の授業の中では行われていたはずである。当時の漢字スキル開発会議に、私も参加していて、向山氏からそのような内容を聞いたはずなのだ。向山氏が実際に授業で行っていること（指で書いて、なぞって、写す）を、私が「それなら“指書き、なぞり、写し書き”ですね」と語呂が良いので口に出すと、「それがいい」と、用語名が決定されただけは覚えていたからである。

向山洋一全集 35 を読むと、やはり鉛筆を持って漢字練習する前に、指書きを指導していたことが記述されている。ここで述べられている基本原理は「指で書けるまで鉛筆で書かせない」ということである。そのことを裏付ける資料が 4 の 2 通信「アチャラ」N o 10（1982・4・15）に書かれていた。「練習は人それぞれに」から抜粋する。

「国語の時間に漢字の練習をさせた。指で筆順をたどらせ、ドリルの練習用のマスに書かせ、その上で漢字ノートに何回も書かせたのである。」（＊文献 16）

なお、名取氏の思い出に「漢字テストの答え合わせで、向山先生はとめ・はね・はらいはとても厳しかった」という証言も貴重である。点画の終筆はこの三つのいずれかにあたり、書家が文字をきれいにまとめる際のポイントにもなっているからだ。

このような指導の蓄積が、1986 年の「あかねこ漢字スキル」開発に結実した。

IV. あかねこ漢字スキルで漢字を覚える

あかねこ漢字スキルは練習のシステム化、そしてテストのシステム化に特長がある。とくに二段枠のテストページに真骨頂ありといえる。

あかねこの大きな特徴は 2 回分のテスト枠にある。他社も真似をするようになった。

間違えた漢字だけをすればよい。同様の趣旨のことを興水実が『国語科教育学入門』の最後で提唱している。「書き取り練習のあとになってテストするよりも事前にテストすること。そうしてすでによくできる字は練習からはずすというような「診断的指導」のやり方を採用することだ（中略）どの字がむずかしいのか、どこをどうまちがえやすいのかをあらかじめ心得ておくこと。そういう「科学性を取り入れること」が可能である。」

（＊文献 1）

1985 年、漢字スキルの開発当時、全社がくりかえし漢字ドリルであった。スキルの命名は向山氏が初めてであったと思う。他社教材全部を比較対照して調べたとき、どれもが〇〇ドリル、という名称であった。ドリルは工具の機械のように、同じ形式の運動の繰り返しによって効果を上げることをねらうため、繰り返し練習と呼ぶ。手元にある平井昌夫の

文献はドリル教材についても詳述され、スキル教材との対比に参考になる。

1. あかねこを他の7社スキルと対比する

昨年、次のような対比表を作成し、各社の漢字スキルの長短を調べた。

表 1. 1 学年の漢字スキル対比表（一部で、他の6社は省略）

	使い方（ステップ）	新しい漢字	テストの練習	力だめし	テスト	テスト
光村・あかねこスキル	①漢字を覚える（ゆびがき・なぞりがき・うつしがき） ②テストの練習（なぞろう、うつそう、たしかめよう） プレテスト ③テスト（1回目上、2回目下に誤字のみ） うら（間違えた字の練習文づくり練習）	手本字の書き順 手本の下右側に意味や読みの用例 左側漢字練習→読み先習 書き順色を示す位置、 漢字練習5マス、 筆順シンプル 筆順で気を付ける ところ「小」の注意書き、はねるのみ 豆知識	1 読み方 2 なぞろう 3 うつそう 4 たしかめよう 書き取りは3回反復で横に進む	二学期のまとめ	2 段フル 下段は間違いの再テストのみ おおきい こえをだす。→□ ※プレテストあり	スキル本体付属の切り取り式
A社	1 おぼえる（ゆびでなぞる・えんぴつでなぞる・みてかく） 2 れんしゅう 3 たしかめ 4 テスト	手本下右側が漢字練習、左側用例。 →書き先習 覚える頁「かんじのなりたち、まちがえないで」等、 注意、字形、練習マスなど複数あり 統一されず 「小」の注意書きはねる、はらう、とめる、3つあり	1 段目読み 2, 3 段目書き	上巻のまとめ (1) ~ (3)	たしかめ 2 段 おおきい □さかな。送り仮名あり。 もう一度確かめましょう おおきい □	確かめとほぼ同じ問題のテスト バラ別冊

8社を比較対照したうえでの、あかねこ漢字スキルの特長について述べる。

- ① 手本の大文字に小さな赤字で筆順の数字が示されている。→手本字をしっかりと指書きをさせるための配慮である。大きさも配慮されている。
- ② 手本文字の背景が全社黄色だが、その色の濃淡が異なり、あかねこは適度な薄からず濃からず、という印象をもつ。
- ③ 三つのステップは「（ゆび・なぞり・うつし）がき」で書く練習としての一貫性をもたせる。他社は読む・なぞる・書く、あるいはなぞる・なぞる・書く、というようになっている。ステップ名称が無い教材も三社ある。

④手本下の用例、筆順、五マス練習の三つの並び方であるが、あかねこは用例が初めに並ぶ。小さなことだが「読み先習」の配慮ともいえよう。

⑤れんしゅうページはなぞり、うつし、たしかめの三段構成になっている。ここで他社との大きな違いは漢字ごとに上から下へと練習するのではなく、横に進めていくということである。これは縦に練習するよりもワーキングメモリーを鍛えることになる。

⑥テストページが本体付属になっているのは「あかねこ」だけである。他社は別冊かバラプリントの形式となる。しかもテストの解答枠が二段になっているのが最大の特長だ。

2. 指書きの原理を分析する（学年により、表記が異なるが本章では指書きで統一）

あかねこ漢字スキルの特長である、指書き、なぞり書き、うつし書き、空書きは辻歌子氏、古田拡等も主張している原則的な指導法といえる。

例えば、国語教育の先達のひとり古田『国語教材研究』には、次のような記述がある。
▼小学校一、二年で、丁寧に教える。まずゆっくりと、正しく、大きく、力をこめて板書して見せる。次には、子供に向かって、いっしょに空書する。子供の方から見て正しい形になっているように。これを二回繰り返し、今度は子供だけにさせて見てやる。（注意すべき子をその時見付ける）さらに、机上に指で書かせてみて、それからノートを開かせて、書かせるというような段取りである。▲

古田は筆順指導を言及するなかで机上での指書きを強調した。指書きで字形を覚えることはもちろんだが、筆順の習得にも欠かせない要因ともなっている。

指書き指導に関しては、貴重な資料が教室ツーウェイ誌などに掲載された。

椿原正和氏が絶賛し、向山氏も高く評価した奥田純子氏の指書きの三原則である。椿原氏はこの三原則を次のように述べている。

指書きの時「①鉛筆を持ったまま」「②とめ・はね・はらいを雑に」「③指を宙に浮かせたまま」指書きしている子供は漢字の定着率が悪くなるというものである。

この三原則の詳細を、奥田氏本人の論稿から要点を抽出してみる。

- 1) 筆順を「覚えるまで」は鉛筆を持たない。「覚えるまで」とは、スピードを上げて書けること、筆順を見なくても書けること、と奥田氏は定義する。
- 2) 指書きは指をしっかりと机に付けて書かせ、指の刺激を脳に伝えさせる。
- 3) とめ・はね・はらいを丁寧に。人差し指の先が熱くなるくらい指書きせよ、と例示。
- 4) 指書きステージは、まずスキルの筆順を見ながら机上に指書き。覚えたと思ったら、机上の指を見ながらの指書き。そして字形の残像が見えるくらいの速さで書けたら合格。椿原氏はこれを視線の２段階移動説と呼んだ。
- 5) 筆順は机上で一緒に書く。教師の指書きを見せながら一緒に３回ほど指書きさせる。奥田氏は、漢字の苦手な子のために、漢字指導だけのテープ起こしを、２年間続けた。指書きというたった一つの指導だが、ここまで子供の事実を突き詰めて考えたのである。
- 4) の段階でもまだスキルの上に指書きする子がいたが、奥田氏はその子の手を取って机上に置かせ、この動作を繰り返し行っただけという。できない子を何としてもできるようにさせるという、その情熱に驚かされる。

向山氏は「奥田先生のような全国区の教師というのは、このように一人の子供と向き合った教師のことを言うのだ」（＊文献７）と向山型国語教え方教室で話された。

3. 指書き・なぞり書きを分析する

なぞり書きは、モンテッソーリのアルファベットの読み書き教育の第2段階で登場する指導の一つでもあった。子供の様子を観察することからそのような段階的な指導法を取り入れたという。モンテッソーリも子供の事実から教育を始めていた。

「あかねこ漢字スキル」の指書きとなぞり書きについて、以下、ポイントを述べる。

手本の字に筆順の数字が示されているのは「あかねこ漢字スキル」(図1)のみである。一方他社7教材は、筆順が書いてある横の五マスの書き込み練習の1マス目の漢字に示されている。つまり、なぞり書きをする漢字部分に小さく示されている。

一方のあかねこはなぞり書きのマスの中には全く示されていない。

この両者の違いは小さなことであるが、指導法の工夫の観点からみるととても大きな違いになる。あかねこスキルでは、筆順を覚えるのは机上での指書き段階で完結させる。他

の7社は鉛筆でなぞりながら字形と筆順を意識させることになる。つまり前者は一時に一事、後者は一時二事になる。子供の負担はどちらが軽いか自明の理である。

あかねこスキルには、そのことを目次ページに懇切丁寧に「ゆび書きのしかた」が明記されている。以下6年の例を示す。

①筆順を言いながら、つくえの上に指で書きます。

②手本を見なくても漢字が書けるようになるまで、何度も指で書きます。



図1. 令和4年版あかねこかんじスキル光村準拠1年上2ページ

③もう覚えたと思ったら、鉛筆を持って、なぞり書き・うつし書きをします。

単なる指書きかもしれないが、そこに込められている指導法に深い意味がある。前述したように奥田氏が一人の子と関わり、その子供の事実から発見した手立てがこのスキルには反映されている。

手元にある旧版の6年スキル表2のスキルの使い方ページに示されている「ゆび書き」の説明は、次のように変遷している。

- A 書き順をみながら、つくえの上にゆびで書きましょう。
- B 筆順を見ながら、つくえの上に指で書きましょう。「いち、にい、さん・・・」と、画数を言いながら書きます。
- C 筆順を見ながら、指で書きましょう。「いち、にい、さん・・・」と、画数を言いながら書きます。

現行：筆順を見ながら、ゆびで書きましょう。「いち、にい、さん・・・」と、画数を言いながら書きます。

目次ページの「ゆび書きのしかた」を、さらに具体的に三段階にわたり解説している。いかに大切な段階であるかが分かる。

この指書き指導は、実は、発達障害のある子供にも対応できると向山氏は述べる。文字

を書く時、親指と人差し指が微妙に屈伸運動をしている。微細運動障害の子はこの微妙な動きができない。指が棒の状態を書くことになり、書字が難しい。ところが、漢字スキルの場合にはまっすぐに伸ばした人差し指を用いて指書き指導を行う。鉛筆を持たなくても筆順や字形を覚えることが可能となるのだ。

4. 空書きの原理を調べる

漢字指導の際によく使われる空書きは、佐々木・渡辺（1983）によって「空書（くうしょ、からがき）」と命名され、実験心理学の対象となったという。ただ、教育界においては、例えば1968年の興水実『国語科教育学入門』には、「実際家の漢字学習指導の主なやり方のひとつに“子どもに空書させたり、ノートに書かせたりする”と記述されており、また1956年発刊、西尾実を編集委員代表とする『国語教育辞典』（朝倉書店）にも項目一覧に【空書】で掲載されている。少なくとも教育界では、戦後すでに使われていた用語であることが分かる。内容の本文冒頭は次の通りである。

「くうちゅうがき・そらがき・ゆびがきともいわれ、指で空間か机の上に文字を書くことをいう。」（＊文献11）

空書に似た現象として「なぞり読み」がある。脳損傷の患者が目では読めなくとも、文字の線を指でなぞると読めるという現象である。

この空書やなぞり読みのように、指運動が文字認知を援助していることを研究としてまとめた文献が松尾香弥子『空書の脳内メカニズム』である。

（※その他ネットにも「空書」に関する情報提供はあり。）

ただし、この本書での研究対象の空書とは、筆順や字形を子供たちが覚えたかどうかを確認するために一斉に意図的に行う空書きではなく、文字を思い出そうとしてふと空中に字形を指で書くその動作の出現のことをいう。この空書の出現は児童の場合は高学年ほどよく用いられることが分かっている。松尾氏は空書を次のように定義している。

「空書とは、文字処理に伴って、何ら外的な必然性がないにもかかわらず自発的に生じ、知覚できる視覚的軌跡が残らない書字運動のことをいう。」（＊文献12）

この研究で得る知見は、授業で行う空書きに関する情報としても十分に役立つはずだ。興味深い知見がある。

漢字を想起させる課題を出したときに、空書の出現の様子に二通りあったという。一つは、身体前面つまり目の前の空間への空書、もう一つは膝や机、手のひらなどの書字面をもつ空書である。この時、後者の被験者はほぼすべての者が書字面を凝視していたという。一方前者の場合、被験者は空間を見ることはまれで、手指をただふるわせていただけという感じであったという。これは極めて重大な指摘である。

例えば、あかねこ漢字スキルの指書きでは机の上にしっかりと書くことを重視している。そうすることで、字形素やそれを統合した字体をしっかりと見つめることになるからだ。

一方、一斉に空書きをする動作は、字体を正しく書いているのかを確認するというよりも、筆順と画との対応を確認する作業が主となっていることを意味するのではないか。この知見を読み、空書や指書きの大切さがみえてくるような気がした。

本研究の結論を、自分なりに解釈し次のようにまとめた。

①空書は視覚における漢字のイメージ生成を特に援助している。

また空書の際に、漢字の字形を提示して空書きさせる場合と、読みだけを聞かせて空書

きする場合では、脳の活動部位が異なる結果がもたらされたが、いずれの場合でも、指運動が神経的負荷の低減をもたらしていた。

②空書には視覚化を中心としたリフレッシュ機能（再書き込み・活性化）をもつ。

筆順をカウントしながら空書する場合、単に「いち、にい、さん・・・」と書き順を確認しているのではなく、複雑な漢字図形全体の中から、一画ずつ着目し、視覚化していることになる。これは分節のための視覚化であり、自分の眼には漢字の全体像が映っているが、心内の目には一画だけを注目して見る働きが、指運動にはあるのかもしれない。

本書で得たこうした知見には、漢字指導の実際に生かせることが可能である。

V. 漢字文化の授業で漢字を考える

それは上海実験学校で始まった。中国の小学生を相手にしての向山氏の授業であった。李軍氏は1950年代から今日までの個人による漢字指導法を取り上げて分析を行った。石井式指導法、白井光邦の要素形的漢字学習指導法、卯月啓子の漢字と遊ぶ・学ぶ指導法、宮下久夫の「分ければ見つかる知ってる漢字」指導法、小林一仁の系統的漢字指導の指導法、そして向山洋一の漢字文化「土～生」の授業の指導法である。

なお「『漢字文化』という用語は、向山先生以外の方から聞いたことがないので、向山先生の命名だと思う」と野口芳宏氏は述べている。

李氏は、向山氏の漢字文化の授業について、良さと課題を次のように分析する。

▼漢字の成り立ちや字源に基づいて基礎漢字（象形、指示、会意文字など）を絵図化して学習者の興味関心の喚起には有効であるが、学習漢字の大半である形声文字等の指導に限界がある。▲

李氏はここで漢字文化の授業の限界性を述べているが、氏が分析する際に用いた資料は向山氏の上海実験学校での「土～生」の授業と、教育科学国語教育2005年10月号特集「子どもが熱中する『漢字文化』の授業」の19の実践例であった。確かにこれらの授業実践例の大半は象形文字を扱う授業である。

しかし、漢字文化の授業の中心者である神谷祐子氏はすでにそのことも視野に入れており、小学校で学習する約1000字のおよそ半分が形声文字であること、この形声文字は漢字全体の九割を占め、学年が上がるほどその割合が増えることも調査済みである。そのうえで、漢字全体のおよそ200の文字や記号の組合せ方が理解できれば、覚えやすくなると『漢字文化をこう教える第5学年』で解説している。

なお、李氏は他の五種類の指導法についても良さと課題を分析したうえで、六種類のいずれの実践もこれまでの丸暗記や字形重視、ドリル的な日本の指導スタイルを改善しようとする姿勢を評価している。そしてこれらの実践の改善方向は興味・関心を持って自主的に漢字を習得する姿勢が必要になり、これまでの覚える学習重視から考える学習への転換を図ることの必要性を強調した。そのために漢字文化という広い視野からの語彙の拡充や漢字の役割に着目してそれらを生かす漢字指導法の開発を自らに課している。

一方で、あまりに凝り過ぎた学術的な字源指導に気を付けるべきだと主張する研究者もいる。この方法は書き言葉によるコミュニケーション学習から離れ、単に漢字の書き言葉の研究になってしまうというのが批判の理由であり、凝り過ぎても適切な学習に値しないということである。口唱法の実践研究家である下村昇氏も、学者や研究者によって字源や

成り立ちなどの解釈に相違があると指摘するが、それにも符合する。

Ⅵ. 「全学年漢字まとめくん～小学校で習う 1026 字」で漢字を覚え、考える

本教材の利用価値は内容と構成を見れば、明らかである。以下、次の点を説明する。

1. 本誌の内容と特長

本誌は、次の四つの内容によって構成されている。

- 1) イラストや物語などで楽しめるもの（イラスト漢字・物語漢字）
- 2) クロスワードやパズルなど、考えて楽しめるもの
（熟語クロス・四字熟語・慣用句・ことわざ・クロスワードパズルなど）
- 3) 学期ごとの漢字まとめ（学期別漢字まとめくん）
- 4) 学年で習う漢字の総まとめ（漢字総まとめくん）

これらの内容には、次の特長がある。

本誌表紙にはまず 1 パズルで鍛える、2 絵と結びつけて覚える、3 物語を読みながら身につける、4 総まとめで定着させる、と示されている。これらを常に意識するとよい。

イラスト漢字は、漢字を単独で覚えるのではなく、周りのイラストと関連付けてイメージ化させ、覚えやすくすることをねらっている。とくに低学年の配当漢字は象形文字が多く、イラストで表せる漢字が多くなっている。

物語漢字という形式は、師尾喜代子氏がこれまでに学研や旺文社、光村教育図書やPHP など多くの教材開発を手掛けてきた中から誕生してきたもので、全国の教室で活用されている。題材には、世界の童話や日本の昔話から知ってほしい作品を選んでいる。本誌では物語数が少ないが、同氏著『小学校の漢字を 5 時間で攻略する本』には 24 作品の物語漢字が掲載されている。

パズルとは、「頭を悩ませる」という意味で、クイズのように知識や記憶を問うのではなく、与えられた情報を推理したり、それらを組み合わせたりして求めるものを導き出すといった考える要素の強い「あてもの遊び」である。クロスやクロスワードもパズルの一種になる。クロスワードパズルは直観力や推理力も駆使する脳の総合格闘技と例える記事もある。

教室ツーウェイでもかつて「クロスワードパズルで教科書のまとめ」が特集された。その解説で、向山氏は教科書のまとめを楽しみながら学習してほしい、と提案された。あくまでも「楽しく学習」が主になっている。そのため、分からない子には、時間を見計らってヒントを出してほしいと、細やかな配慮も見せている。本誌のたてとよこのヒントも可能な限りそのような配慮を反映させるように作成していることが伺える。

なお、Ⅲ章の 2 「中国の漢字教育」のところでも触れたが、ゲームとなぞなぞは漢字を覚えるのに最適であると、中国北京大学の教師が述べている。なぞなぞの遊びで想像力を育むことができ、形の混同しやすい漢字の違いもなぞなぞを使って違いを学んでいる。クロスやクロスワードも同様な効果をもたらすものである。

野口芳宏氏も「漢字ゲーム、漢字パズル、漢字遊びなどは子供の興味を尊重し、優先させ、そこからの習得を図ろうとする考えに立つ」とその意義を示し、この方面での開発が向山先生を中心として試みていることに、注目していた。

2. 授業や学級での活用法

すでに学級担任を離れているため本誌を直接利用することはできない。担任当時は本誌の旧版である「完本全学年漢字まとめくん」を毎年度活用していた。

利用頻度が高いページが本誌の「総まとめくん 100 問」であった。年度はじめの前年度の実態調査用と年度末の定着度調査には、必ず利用した。学級での漢字指導は、この総まとめくんの結果からスタートしていた。それほど重視した。

この 100 問という数量が貴重で、以前は高学年の「うつしまるくん」にもたしかめ 100 問があったが、現在は 50 問のたしかめテストになっている。しかも、テスト問題の答えが漢字に限定されているのが工夫の一つである。つまり純粋にその漢字を覚えているかどうかの実態把握には大切な要件で、解答枠の前後に言葉や文があるとそれらが手がかりとなってしまうので、偶然に正答する場合も生じてしまう。学期別まとめくんのページなどはもちろんそのような手がかりはあってよいが、定着・習得度を測定するための学年の総まとめでは必要としない、ということである。本誌はそのような細かな工夫が行き届いている。

Ⅶ. 「使える学習」「熱中軸」の視点から、向山実践を捉え直す

1. 漢字教育と「使える学習」

①漢字が「使える」とは、日常生活で漢字を適切に使えるようになる、ということである。その一例として、日記や作文、学級新聞、学習ノートなどの中で、漢字を正書法として用いることができる、と捉えることができる。

正書法とは、漢字で書く言葉はきちんと漢字で書き表す、ということである。ところが日本の場合、文字の種類が漢字、ひらがな、カタカナがあり、表記の仕方も幾通りか可能な言葉があったりするため、外国のようにこの書き方で表すということが定められないというような難しさはあるが、少なくとも学年教科書に準拠した漢字表記ができるようになることが望ましい。

大村はまも、言語生活の中で実際に漢字を活用できる力が、真の漢字力と考えていた。

具体的には、自分が表現したい言葉をまず考え、それを漢字を使って書くという勉強にも力を入れてほしいと生徒たちに強調している。

②例えば、向山氏の日記指導について、学年別学級経営本を調べてみた。

小学一年 第7章 授業を知的に（国語を教える）

小学二年 第1章 二年生の出立（日記提出率、個人新聞など）第6章保護者との絆

小学三年 第3章 新卒日記を書く 第4章 書かせて育てる（子供に日記を書かせる）

小学四年 第1章 授業を知的に（文を長く書く）

小学五年 第5章 文章は個性に満ちて（よい子の日記をのりこえろ）

小学六年 第2章 日記を書かせる

学級経営本からも漢字指導同様、日記指導や文章を書かせていたことが伺える。つまり、向山氏は新卒時代から「使える学習」の実践にも取り組んでいたのである。

また6年スナイパーの文章指導でも漢字使用の心得を示していた。基本の第一は、文末は敬体か常体かどちらかに統一する。第二は主語・述語があること。第三は、漢字、言葉遣いが正確なこと。そして第三の心得として、学校で習った漢字を使うことと辞書を引くことを厭わないこと等「使える学習の基礎」を、向山氏はしっかりと強調していた。

③このように向山氏は新卒時から退職まで、漢字を覚える、考える、使える学習に取り組む、なおかつ漢字教育の一大改革として「漢字学習の構造改革」も提言している。

この改革の大きな柱の一つが「読み先習」である。

第Ⅲ章「これまでの漢字指導と向山実践」では触れていないが、漢字指導の問題として、かつて「読み書き分離学習」の論争が行われた。現在の小学校では、教科書の新出漢字を教える際には、読みと書き同時学習の形になっている。けれども子供は小学校に入学する前から生活の中で漢字の読み書きに触れており、読みが先行している現実がある。

倉沢栄吉も次のように述べている。「漢字の活用力はどこからくるかと言えば、実際の生活場面で多く読んだり書いたりする経験を重ねるところからである。（中略）読みは書きに先行するはずである。」（＊文献 10）

このように「読み先習」で取り組む姿勢は、生活の中で「使える学習」の一つを成立させることにもなる。向山氏は、漢字の習得には「読み先習」という分離学習を 2000 年前後から主張しており、「使える学習」にも取り組んでいたといえよう。

興水実、石井勲、野口芳宏氏など国語の先達は、読み書き分離学習を支持する人が多い。野口氏は自著でも「板書はなるべく漢字を使う」（＊文献 11）と述べている。さらには、どの程度までの漢字を提示するかは、学級の実態を知る担任が決めることで、常に診断と評価を怠らないようにと助言もする。

2. 「漢字文化検定」の提案と「難問一問選択システム」

①「読み先習」は「使える学習」を身近な生活に置き換えた場合の考え方といえる。一方、生涯学習的な立場で捉えると「検定制度」への挑戦という場面も成り立つ。

向山氏は、漢字教育の一環として「漢字文化の授業」を提案した。それをさらに学校教育の範疇だけでなく、生涯学習として誰もが取り組める「日中漢字文化検定」を 97 年に構想していた。手元にある「日中漢字検定覚書 97. 11. 19 板倉」の一部を紹介する。

1) 検定の中身は二つ（上海師範大学楊学長、向山先生との交渉にて）

ア漢字の成り立ち・意味（主として象形文字）

イ中国二十四史のなかで、ことわざ・慣用句等

字形の違いは両方示す。基本は康熙字典。

2) 検討事項

象形文字だと数が限られること、四字熟語（成語）の共通字の扱い、簡体字などを自分（板倉）なりの疑問点を述べた。例えば成語で「一挙兩得、大同小異」は日中共通だが、金科玉条（金科玉律）日進月歩（日新月異）などは、多少の差異があること。（以下略）

当時は実現の緒につかなかったが、現在の日中問題を考慮したとき、このような文化交流の重要性を実感せずにいられない。

②漢字を使えるためには、子供たちを学習に熱中させ、挑戦させる仕組みも必要となる。その熱中・挑戦型教材がもう一つの向山型算数といわれる難問選択システムである。

向山氏自身は算数の学習内容でこれを開発されたが、向山型算数実践研究家の木村重夫氏が、国語でこの教材開発に取り組んでおり、2005 年箱根合宿の論文審査で提案された。「国語科で“難問一問選択システム”は可能か」の論文の内容を概略まとめた。

a 国語科で難問一問選択システムは可能か

b 国語で子供が熱中する難問 仮説と吟味した問題

c 難問配列のロジック（漢字ばかりでなく、ことわざ・文法・ことば遊びなど多様に入れた。下図は、木村氏作成の難問選択システムの1枚である。

① 足袋 (Tabi) ()

② 独楽 (Ukiyo) ()

③ 猛者 (Musho) ()

④ ヤミヤミ (Yamiyami) ()

⑤ 椅子 (Ishi) ()

⑥ 粉薬 (Konyaku) ()

⑦ はし (Hashi) ()

⑧ 鏡 (Kagami) ()

⑨ 通 (Toou) ()

⑩ 服 (Fukuro) ()

⑪ 足 (Ashi) ()

⑫ 枚 (Hishi) ()

⑬ 面 (Omote) ()

⑭ 頭 (Atama) ()

⑮ 丁 (Chou) ()

⑯ 膳 (Dan) ()

⑰ 氏 (Shi) ()

⑱ 脚 (Kaku) ()

⑲ 通 (Toou) ()

⑳ 服 (Fukuro) ()

㉑ 足 (Ashi) ()

㉒ 枚 (Hishi) ()

㉓ 面 (Omote) ()

㉔ 頭 (Atama) ()

㉕ 丁 (Chou) ()

㉖ 膳 (Dan) ()

㉗ 氏 (Shi) ()

㉘ 脚 (Kaku) ()

㉙ 通 (Toou) ()

㉚ 服 (Fukuro) ()

㉛ 足 (Ashi) ()

㉜ 枚 (Hishi) ()

㉝ 面 (Omote) ()

㉞ 頭 (Atama) ()

㉟ 丁 (Chou) ()

㊱ 膳 (Dan) ()

㊲ 氏 (Shi) ()

㊳ 脚 (Kaku) ()

㊴ 通 (Toou) ()

㊵ 服 (Fukuro) ()

㊶ 足 (Ashi) ()

㊷ 枚 (Hishi) ()

㊸ 面 (Omote) ()

㊹ 頭 (Atama) ()

㊺ 丁 (Chou) ()

㊻ 膳 (Dan) ()

㊼ 氏 (Shi) ()

㊽ 脚 (Kaku) ()

㊾ 通 (Toou) ()

㊿ 服 (Fukuro) ()

㋀ 足 (Ashi) ()

㋁ 枚 (Hishi) ()

㋂ 面 (Omote) ()

㋃ 頭 (Atama) ()

㋄ 丁 (Chou) ()

㋅ 膳 (Dan) ()

㋆ 氏 (Shi) ()

㋇ 脚 (Kaku) ()

㋈ 通 (Toou) ()

㋉ 服 (Fukuro) ()

㋊ 足 (Ashi) ()

㋋ 枚 (Hishi) ()

㋌ 面 (Omote) ()

㋍ 頭 (Atama) ()

㋎ 丁 (Chou) ()

㋏ 膳 (Dan) ()

㋐ 氏 (Shi) ()

㋑ 脚 (Kaku) ()

㋒ 通 (Toou) ()

㋓ 服 (Fukuro) ()

㋔ 足 (Ashi) ()

㋕ 枚 (Hishi) ()

㋖ 面 (Omote) ()

㋗ 頭 (Atama) ()

㋘ 丁 (Chou) ()

㋙ 膳 (Dan) ()

㋚ 氏 (Shi) ()

㋛ 脚 (Kaku) ()

㋜ 通 (Toou) ()

㋝ 服 (Fukuro) ()

㋞ 足 (Ashi) ()

㋟ 枚 (Hishi) ()

㋠ 面 (Omote) ()

㋡ 頭 (Atama) ()

㋢ 丁 (Chou) ()

㋣ 膳 (Dan) ()

㋤ 氏 (Shi) ()

㋥ 脚 (Kaku) ()

㋦ 通 (Toou) ()

㋧ 服 (Fukuro) ()

㋨ 足 (Ashi) ()

㋩ 枚 (Hishi) ()

㋪ 面 (Omote) ()

㋫ 頭 (Atama) ()

㋬ 丁 (Chou) ()

㋭ 膳 (Dan) ()

㋮ 氏 (Shi) ()

㋯ 脚 (Kaku) ()

㍰ 通 (Toou) ()

㞔 服 (Fukuro) ()

㞕 足 (Ashi) ()

㞖 枚 (Hishi) ()

㞗 面 (Omote) ()

㞘 頭 (Atama) ()

㞙 丁 (Chou) ()

㞚 膳 (Dan) ()

㞛 氏 (Shi) ()

㞜 脚 (Kaku) ()

㞝 通 (Toou) ()

㞞 服 (Fukuro) ()

㞟 足 (Ashi) ()

㞠 枚 (Hishi) ()

㞡 面 (Omote) ()

㞢 頭 (Atama) ()

㞣 丁 (Chou) ()

㞤 膳 (Dan) ()

㞥 氏 (Shi) ()

㞦 脚 (Kaku) ()

㞧 通 (Toou) ()

㞨 服 (Fukuro) ()

㞩 足 (Ashi) ()

㞪 枚 (Hishi) ()

㞫 面 (Omote) ()

㞬 頭 (Atama) ()

㞭 丁 (Chou) ()

㞮 膳 (Dan) ()

㞯 氏 (Shi) ()

㞰 脚 (Kaku) ()

㞱 通 (Toou) ()

㞲 服 (Fukuro) ()

㞳 足 (Ashi) ()

㞴 枚 (Hishi) ()

㞵 面 (Omote) ()

㞶 頭 (Atama) ()

㞷 丁 (Chou) ()

㞸 膳 (Dan) ()

㞹 氏 (Shi) ()

㞺 脚 (Kaku) ()

㞻 通 (Toou) ()

㞼 服 (Fukuro) ()

㞽 足 (Ashi) ()

㞾 枚 (Hishi) ()

㞿 面 (Omote) ()

㟀 頭 (Atama) ()

㟁 丁 (Chou) ()

㟂 膳 (Dan) ()

㟃 氏 (Shi) ()

㟄 脚 (Kaku) ()

㟅 通 (Toou) ()

㟆 服 (Fukuro) ()

㟇 足 (Ashi) ()

㟈 枚 (Hishi) ()

㟉 面 (Omote) ()

㟊 頭 (Atama) ()

㟋 丁 (Chou) ()

㟌 膳 (Dan) ()

㟍 氏 (Shi) ()

㟎 脚 (Kaku) ()

㟏 通 (Toou) ()

㟐 服 (Fukuro) ()

㟑 足 (Ashi) ()

㟒 枚 (Hishi) ()

㟓 面 (Omote) ()

㟔 頭 (Atama) ()

㟕 丁 (Chou) ()

㟖 膳 (Dan) ()

㟗 氏 (Shi) ()

㟘 脚 (Kaku) ()

㟙 通 (Toou) ()

㟚 服 (Fukuro) ()

㟛 足 (Ashi) ()

㟜 枚 (Hishi) ()

㟝 面 (Omote) ()

㟞 頭 (Atama) ()

㟟 丁 (Chou) ()

㟠 膳 (Dan) ()

㟡 氏 (Shi) ()

㟢 脚 (Kaku) ()

㟣 通 (Toou) ()

㟤 服 (Fukuro) ()

㟥 足 (Ashi) ()

㟦 枚 (Hishi) ()

㟧 面 (Omote) ()

㟨 頭 (Atama) ()

㟩 丁 (Chou) ()

㟪 膳 (Dan) ()

㟫 氏 (Shi) ()

㟬 脚 (Kaku) ()

㟭 通 (Toou) ()

㟮 服 (Fukuro) ()

㟯 足 (Ashi) ()

㟰 枚 (Hishi) ()

㟱 面 (Omote) ()

㟲 頭 (Atama) ()

㟳 丁 (Chou) ()

㟴 膳 (Dan) ()

㟵 氏 (Shi) ()

㟶 脚 (Kaku) ()

㟷 通 (Toou) ()

㟸 服 (Fukuro) ()

㟹 足 (Ashi) ()

㟺 枚 (Hishi) ()

㟻 面 (Omote) ()

㟼 頭 (Atama) ()

㟽 丁 (Chou) ()

㟾 膳 (Dan) ()

㟿 氏 (Shi) ()

㠀 脚 (Kaku) ()

㠁 通 (Toou) ()

㠂 服 (Fukuro) ()

㠃 足 (Ashi) ()

㠄 枚 (Hishi) ()

㠅 面 (Omote) ()

㠆 頭 (Atama) ()

㠇 丁 (Chou) ()

㠈 膳 (Dan) ()

㠉 氏 (Shi) ()

㠊 脚 (Kaku) ()

㠋 通 (Toou) ()

㠌 服 (Fukuro) ()

㠍 足 (Ashi) ()

㠎 枚 (Hishi) ()

㠏 面 (Omote) ()

㠐 頭 (Atama) ()

㠑 丁 (Chou) ()

㠒 膳 (Dan) ()

㠓 氏 (Shi) ()

㠔 脚 (Kaku) ()

㠕 通 (Toou) ()

㠖 服 (Fukuro) ()

㠗 足 (Ashi) ()

㠘 枚 (Hishi) ()

㠙 面 (Omote) ()

㠚 頭 (Atama) ()

㠛 丁 (Chou) ()

㠜 膳 (Dan) ()

㠝 氏 (Shi) ()

㠞 脚 (Kaku) ()

㠟 通 (Toou) ()

㠠 服 (Fukuro) ()

㠡 足 (Ashi) ()

㠢 枚 (Hishi) ()

㠣 面 (Omote) ()

㠤 頭 (Atama) ()

㠥 丁 (Chou) ()

㠦 膳 (Dan) ()

㠧 氏 (Shi) ()

㠨 脚 (Kaku) ()

㠩 通 (Toou) ()

㠪 服 (Fukuro) ()

㠫 足 (Ashi) ()

㠬 枚 (Hishi) ()

㠭 面 (Omote) ()

㠮 頭 (Atama) ()

㠯 丁 (Chou) ()

㡀 膳 (Dan) ()

㡁 氏 (Shi) ()

㡂 脚 (Kaku) ()

㡃 通 (Toou) ()

㡄 服 (Fukuro) ()

㡅 足 (Ashi) ()

㡆 枚 (Hishi) ()

㡇 面 (Omote) ()

㡈 頭 (Atama) ()

㡉 丁 (Chou) ()

㡊 膳 (Dan) ()

㡋 氏 (Shi) ()

㡌 脚 (Kaku) ()

㡍 通 (Toou) ()

㡎 服 (Fukuro) ()

㡏 足 (Ashi) ()

㡐 枚 (Hishi) ()

㡑 面 (Omote) ()

㡒 頭 (Atama) ()

㡓 丁 (Chou) ()

㡔 膳 (Dan) ()

㡕 氏 (Shi) ()

㡖 脚 (Kaku) ()

㡗 通 (Toou) ()

㡘 服 (Fukuro) ()

㡙 足 (Ashi) ()

㡚 枚 (Hishi) ()

㡛 面 (Omote) ()

㡜 頭 (Atama) ()

㡝 丁 (Chou) ()

㡞 膳 (Dan) ()

㡟 氏 (Shi) ()

㡠 脚 (Kaku) ()

㡡 通 (Toou) ()

㡢 服 (Fukuro) ()

㡣 足 (Ashi) ()

㡤 枚 (Hishi) ()

㡥 面 (Omote) ()

㡦 頭 (Atama) ()

㡧 丁 (Chou) ()

㡨 膳 (Dan) ()

㡩 氏 (Shi) ()

㡪 脚 (Kaku) ()

㡫 通 (Toou) ()

㡬 服 (Fukuro) ()

㡭 足 (Ashi) ()

㡮 枚 (Hishi) ()

㡯 面 (Omote) ()

㡰 頭 (Atama) ()

㡱 丁 (Chou) ()

㡲 膳 (Dan) ()

㡳 氏 (Shi) ()

㡴 脚 (Kaku) ()

㡵 通 (Toou) ()

㡶 服 (Fukuro) ()

㡷 足 (Ashi) ()

㡸 枚 (Hishi) ()

㡹 面 (Omote) ()

㡺 頭 (Atama) ()

㡻 丁 (Chou) ()

㡼 膳 (Dan) ()

㡽 氏 (Shi) ()

㡾 脚 (Kaku) ()

㡿 通 (Toou) ()

㢀 服 (Fukuro) ()

㢁 足 (Ashi) ()

㢂 枚 (Hishi) ()

㢃 面 (Omote) ()

㢄 頭 (Atama) ()

㢅 丁 (Chou) ()

㢆 膳 (Dan) ()

㢇 氏 (Shi) ()

㢈 脚 (Kaku) ()

㢉 通 (Toou) ()

㢊 服 (Fukuro) ()

㢋 足 (Ashi) ()

㢌 枚 (Hishi) ()

㢍 面 (Omote) ()

㢎 頭 (Atama) ()

㢏 丁 (Chou) ()

㢐 膳 (Dan) ()

㢑 氏 (Shi) ()

㢒 脚 (Kaku) ()

㢓 通 (Toou) ()

㢔 服 (Fukuro) ()

㢕 足 (Ashi) ()

㢖 枚 (Hishi) ()

㢗 面 (Omote) ()

㢘 頭 (Atama) ()

㢙 丁 (Chou) ()

㢚 膳 (Dan) ()

㢛 氏 (Shi) ()

㢜 脚 (Kaku) ()

㢝 通 (Toou) ()

㢞 服 (Fukuro) ()

㢟 足 (Ashi) ()

㢠 枚 (Hishi) ()

㢡 面 (Omote) ()

㢢 頭 (Atama) ()

㢣 丁 (Chou) ()

㢤 膳 (Dan) ()

㢥 氏 (Shi) ()

㢦 脚 (Kaku) ()

㢧 通 (Toou) ()

㢨 服 (Fukuro) ()

㢩 足 (Ashi) ()

㢪 枚 (Hishi) ()

㢫 面 (Omote) ()

㢬 頭 (Atama) ()

㢭 丁 (Chou) ()

㢮 膳 (Dan) ()

㢯 氏 (Shi) ()

㢰 脚 (Kaku) ()

㢱 通 (Toou) ()

㢲 服 (Fukuro) ()

㢳 足 (Ashi) ()

㢴 枚 (Hishi) ()

㢵 面 (Omote) ()

㢶 頭 (Atama) ()

㢷 丁 (Chou) ()

㢸 膳 (Dan) ()

㢹 氏 (Shi) ()

㢺 脚 (Kaku) ()

㢻 通 (Toou) ()

㢼 服 (Fukuro) ()

㢽 足 (Ashi) ()

㢾 枚 (Hishi) ()

㢿 面 (Omote) ()

㣀 頭 (Atama) ()

㣁 丁 (Chou) ()

㣂 膳 (Dan) ()

㣃 氏 (Shi) ()

㣄 脚 (Kaku) ()

㣅 通 (Toou) ()

㣆 服 (Fukuro) ()

㣇 足 (Ashi) ()

㣈 枚 (Hishi) ()

㣉 面 (Omote) ()

㣊 頭 (Atama) ()

㣋 丁 (Chou) ()

㣌 膳 (Dan) ()

㣍 氏 (Shi) ()

㣎 脚 (Kaku) ()

㣏 通 (Toou) ()

㣐 服 (Fukuro) ()

㣑 足 (Ashi) ()

㣒 枚 (Hishi) ()

㣓 面 (Omote) ()

㣔 頭 (Atama) ()

㣕 丁 (Chou) ()

㣖 膳 (Dan) ()

㣗 氏 (Shi) ()

㣘 脚 (Kaku) ()

㣙 通 (Toou) ()

㣚 服 (Fukuro) ()

㣛 足 (Ashi) ()

㣜 枚 (Hishi) ()

㣝 面 (Omote) ()

㣞 頭 (Atama) ()

㣟 丁 (Chou) ()

㣠 膳 (Dan) ()

㣡 氏 (Shi) ()

㣢 脚 (Kaku) ()

㣣 通 (Toou) ()

㣤 服 (Fukuro) ()

㣥 足 (Ashi) ()

㣦 枚 (Hishi) ()

㣧 面 (Omote) ()

㣨 頭 (Atama) ()

㣩 丁 (Chou) ()

㣪 膳 (Dan) ()

㣫 氏 (Shi) ()

㣬 脚 (Kaku) ()

㣭 通 (Toou) ()

㣮 服 (Fukuro) ()

㣯 足 (Ashi) ()

㣰 枚 (Hishi) ()

㣱 面 (Omote) ()

㣲 頭 (Atama) ()

㣳 丁 (Chou) ()

㣴 膳 (Dan) ()

㣵 氏 (Shi) ()

㣶 脚 (Kaku) ()

㣷 通 (Toou) ()

㣸 服 (Fukuro) ()

㣹 足 (Ashi) ()

㣺 枚 (Hishi) ()

㣻 面 (Omote) ()

㣼 頭 (Atama) ()

㣽 丁 (Chou) ()

㣾 膳 (Dan) ()

㣿 氏 (Shi) ()

㤀 脚 (Kaku) ()

㤁 通 (Toou) ()

㤂 服 (Fukuro) ()

㤃 足 (Ashi) ()

㤄 枚 (Hishi) ()

㤅 面 (Omote) ()

㤆 頭 (Atama) ()

㤇 丁 (Chou) ()

㤈 膳 (Dan) ()

㤉 氏 (Shi) ()

㤊 脚 (Kaku) ()

㤋 通 (Toou) ()

㤌 服 (Fukuro) ()

㤍 足 (Ashi) ()

㤎 枚 (Hishi) ()

㤏 面 (Omote) ()

㤐 頭 (Atama) ()

㤑 丁 (Chou) ()

㤒 膳 (Dan) ()

㤓 氏 (Shi) ()

㤔 脚 (Kaku) ()

㤕 通 (Toou) ()

㤖 服 (Fukuro) ()

㤗 足 (Ashi) ()

㤘 枚 (Hishi) ()

㤙 面 (Omote) ()

㤚 頭 (Atama) ()

㤛 丁 (Chou) ()

㤜 膳 (Dan) ()

㤝 氏 (Shi) ()

㤞 脚 (Kaku) ()

㤟 通 (Toou) ()

㤠 服 (Fukuro) ()

㤡 足 (Ashi) ()

㤢 枚 (Hishi) ()

㤣 面 (Omote) ()

㤤 頭 (Atama) ()

㤥 丁 (Chou) ()

㤦 膳 (Dan) ()

㤧 氏 (Shi) ()

㤨 脚 (Kaku) ()

㤩 通 (Toou) ()

㤪 服 (Fukuro) ()

㤫 足 (Ashi) ()

㤬 枚 (Hishi) ()

㤭 面 (Omote) ()

㤮 頭 (Atama) ()

㤯 丁 (Chou) ()

㤰 膳 (Dan) ()

㤱 氏 (Shi) ()

㤲 脚 (Kaku) ()

㤳 通 (Toou) ()

㤴 服 (Fukuro) ()

㤵 足 (Ashi) ()

㤶 枚 (Hishi) ()

㤷 面 (Omote) ()

㤸 頭 (Atama) ()

㤹 丁 (Chou) ()

㤺 膳 (Dan) ()

㤻 氏 (Shi) ()

㤼 脚 (Kaku) ()

㤽 通 (Toou) ()

㤾 服 (Fukuro) ()

㤿 足 (Ashi) ()

㥀 枚 (Hishi) ()

㥁 面 (Omote) ()

㥂 頭 (Atama) ()

㥃 丁 (Chou) ()

㥄 膳 (Dan) ()

㥅 氏 (Shi) ()

㥆 脚 (Kaku) ()

㥇 通 (Toou) ()

㥈 服 (Fukuro) ()

㥉 足 (Ashi) ()

㥊 枚 (Hishi) ()

㥋 面 (Omote) ()

㥌 頭 (Atama) ()

㥍 丁 (Chou) ()

㥎 膳 (Dan) ()

㥏 氏 (Shi) ()

㥐 脚 (Kaku) ()

㥑 通 (Toou) ()

㥒 服 (Fukuro) ()

㥓 足 (Ashi) ()

㥔 枚 (Hishi) ()

㥕 面 (Omote) ()

㥖 頭 (Atama) ()

㥗 丁 (Chou) ()

㥘 膳 (Dan) ()

㥙 氏 (Shi) ()

㥚 脚 (Kaku) ()

㥛 通 (Toou) ()

㥜 服 (Fukuro) ()

㥝 足 (Ashi) ()

㥞 枚 (Hishi) ()

㥟 面 (Omote) ()

㥠 頭 (Atama) ()

㥡 丁 (Chou) ()

㥢 膳 (Dan) ()

㥣 氏 (Shi) ()

㥤 脚 (Kaku) ()

㥥 通 (Toou) ()

㥦 服 (Fukuro) ()

㥧 足 (Ashi) ()

㥨 枚 (Hishi) ()

㥩 面 (Omote) ()

㥪 頭 (Atama) ()

㥫 丁 (Chou) ()

㥬 膳 (Dan) ()

㥭 氏 (Shi) ()

㥮 脚 (Kaku) ()

㥯 通 (Toou) ()

㥰 服 (Fukuro) ()

㥱 足 (Ashi) ()

㥲 枚 (Hishi) ()

㥳 面 (Omote) ()

㥴 頭 (Atama) ()

㥵 丁 (Chou) ()

㥶 膳 (Dan) ()

㥷 氏 (Shi) ()

㥸 脚 (Kaku) ()

㥹 通 (Toou) ()

㥺 服 (Fukuro) ()

㥻 足 (Ashi) ()

㥼 枚 (Hishi) ()

㥽 面 (Omote) ()

㥾 頭 (Atama) ()

㥿 丁 (Chou) ()

㦀 膳 (Dan) ()

㦁 氏 (Shi) ()

㦂 脚 (Kaku) ()

㦃 通 (Toou) ()

㦄 服 (Fukuro) ()

㦅 足 (Ashi) ()

㦆 枚 (Hishi) ()

㦇 面 (Omote) ()

㦈 頭 (Atama) ()

㦉 丁 (Chou) ()

㦊 膳 (Dan) ()

㦋 氏 (Shi) ()

㦌 脚 (Kaku) ()

㦍 通 (Toou) ()

㦎 服 (Fukuro) ()

㦏 足 (Ashi) ()

㦐 枚 (Hishi) ()

㦑 面 (Omote) ()

㦒 頭 (Atama) ()

㦓 丁 (Chou) ()

㦔 膳 (Dan) ()

㦕 氏 (Shi) ()

㦖 脚 (Kaku) ()

㦗 通 (Toou) ()

㦘 服 (Fukuro) ()

㦙 足 (Ashi) ()

㦚 枚 (Hishi) ()

㦛 面 (Omote) ()

㦜 頭 (Atama) ()

㦝 丁 (Chou) ()

㦞 膳 (Dan) ()

㦟 氏 (Shi) ()

㦠 脚 (Kaku) ()

㦡 通 (Toou) ()

㦢 服 (Fukuro) ()

㦣 足 (Ashi) ()

㦤 枚 (Hishi) ()

㦥 面 (Omote) ()

㦦 頭 (Atama) ()

㦧 丁 (Chou) ()

㦨 膳 (Dan) ()

㦩 氏 (Shi) ()

㦪 脚 (Kaku) ()

㦫 通 (Toou) ()

㦬 服 (Fukuro) ()

㦭 足 (Ashi) ()

㦮 枚 (Hishi) ()

㦯 面 (Omote) ()

㦰 頭 (Atama) ()

㦱 丁 (Chou) ()

㦲 膳 (Dan) ()

㦳 氏 (Shi) ()

㦴 脚 (Kaku) ()

㦵 通 (Toou) ()

㦶 服 (Fukuro) ()

㦷 足 (Ashi) ()

㦸 枚 (Hishi) ()

㦹 面 (Omote) ()

㦺 頭 (Atama) ()

㦻 丁 (Chou) ()

㦼 膳 (Dan) ()

㦽 氏 (Shi) ()

㦾 脚 (Kaku) ()

㦿 通 (Toou) ()

㧀 服 (Fukuro) ()

㧁 足 (Ashi) ()

㧂 枚 (Hishi) ()

㧃 面 (Omote) ()

㧄 頭 (Atama) ()

㧅 丁 (Chou) ()

㧆 膳 (Dan) ()

㧇 氏 (Shi) ()

㧈 脚 (Kaku) ()

㧉 通 (Toou) ()

㧊 服 (Fukuro) ()

㧋 足 (Ashi) ()

㧌 枚 (Hishi) ()

㧍 面 (Omote) ()

㧎 頭 (Atama) ()

㧏 丁 (Chou) ()

㧐 膳 (Dan) ()

㧑 氏 (Shi) ()

㧒 脚 (Kaku) ()

㧓 通 (Toou) ()

㧔 服 (Fukuro) ()

㧕 足 (Ashi) ()

㧖 枚 (Hishi) ()

㧗 面 (Omote) ()

㧘 頭 (Atama) ()

㧙 丁 (Chou) ()

㧚 膳 (Dan) ()

㧛 氏 (Shi) ()

㧜 脚 (Kaku) ()

㧝 通 (Toou) ()

㧞 服 (Fukuro) ()

㧟 足 (Ashi) ()

㧠 枚 (Hishi) ()

㧡 面 (Omote) ()

㧢 頭 (Atama) ()

㧣 丁 (Chou) ()

㧤 膳 (Dan) ()

㧥 氏 (Shi) ()

㧦 脚 (Kaku) ()

㧧 通 (Toou) ()

㧨 服 (Fukuro) ()

㧩 足 (Ashi) ()

㧪 枚 (Hishi) ()

㧫 面 (Omote) ()

㧬 頭 (Atama) ()

㧭 丁 (Chou) ()

㧮 膳 (Dan) ()

㧯 氏 (Shi) ()

㧰 脚 (Kaku) ()

㧱 通 (Toou) ()

㧲 服 (Fukuro) ()

㧳 足 (Ashi) ()

㧴 枚 (Hishi) ()

㧵 面 (Omote) ()

㧶 頭 (Atama) ()

㧷 丁 (Chou) ()

㧸 膳 (Dan) ()

㧹 氏 (Shi) ()

㧺 脚 (Kaku) ()

㧻 通 (Toou) ()

㧼 服 (Fukuro) ()

㧽 足 (Ashi) ()

㧾 枚 (Hishi) ()

㧿 面 (Omote) ()

と向山氏は学級通信の文章を締めくくった。

このドラマに、堀田龍也氏が主張する熱中軸の一端を私は感じる。堀田氏は「理不尽さとその克服への挑戦」「安心感を奪われた境地への緊張感」を熱中軸成立の要件として掲げた。（＊文献12）当時の現実では、向山氏のエピソードには描写されていない数々の不安や挑戦の軌跡が生じていたことは、想像に難くない。

E児だけでなく、向山学級と向山氏本人もがその軌跡の当事者群であったといえよう。

さらに、教育の根幹とは子供自身がもつ本来の力を発揮させることにある、との向山氏の教育思想・哲学もこのエピソードには込められている。

<文献>

I 章

- 1 香西秀信（2016）：議論入門 ちくま学芸文庫 31～34
- 2 田中久直（1971）：これからの漢字指導 新光閣書店
- 3 向山洋一（2002）：全集35 子どもが熱中する向山型漢字・言語指導 明治図書

II 章

- 1 向山洋一（1997）：年齢別実践記録集全24巻 教育技術研究所
- 2 教室ツーウェイ 1986年呼びかけ号～1989.3月号

III 章

- 1 飛田多喜男（1988）：続・国語教育方法論史明治図書
- 2 高森邦明（1979）：近代国語教育史鳩の森書房
- 3 藤原宏ほか編著（1977）：新しい国語科指導法の創造～基本類型と実践例学研
- 4 柴田義松代表（1979）講座・日本の学力6言語・数日本標準
- 5 読売新聞社社会部編（1976）：日本語の現場第二集：読売新聞社 152
- 6 佐藤喜代治編（1988）：漢字講座12 漢字教育 明治書院
- 7 福沢周亮（1976）：漢字の読字学習～その教育心理学的研究（学燈社）
- 8 千々岩弘一（2015）「国語科教育における漢字指導の共有点とその源流」『日本語学』明治書院 臨時増刊号特集「漢字の指導法」
- 9 教室ツーウェイ 2002.2：漢字学習の構造をどう変えるか
- 10 李凌燕（1998）：中国の小学生はどう中国語を覚えるか、はまの出版
- 11 加藤幸次（2011）：中国の漢字教育小学校1.2年で1800字を学ぶ子供たちヴィヴル
- 12 滑川道夫（1974）：「漢字指導の問題」復刻文化庁国語シリーズVI漢字 教育出版
- 13 向山洋一（1997）：年齢別実践記録集全24巻
- 14 岡山サークルMAK（2012）：向山学級・名取ノート徹底解明講座第1回記録集 57
- 15 向山洋一（2002）：全集35 子どもが熱中する向山型漢字・言語指導 明治図書
- 16 向山洋一（1997）：年齢別実践記録集全20巻「学級通信アチャラ」29
- 17 富澤敏彦（2010）：もっと上手な字が書ける本 三笠書房 65

IV 章

- 1 輿水実（1968）：国語科教育学入門 明治図書 214
- 2 平井昌夫（1974）国語学習指導事典（上）ぎょうせい 125～145
- 3 辻歌子（1982）：子どもの字を上手にする本 学陽書房

- 4 古田 弘 (1955) : 国語教材研究 法政大学出版局 140～149
- 5 03.11-12 向国教え方 : 巻頭微細技術は好きでない、奥田論文 (指書きの三 p)
- 6 04.7-8 向国教え方 : 漢字スキル改訂エピソード 椿原 (奥田の指書き三原則) 18
- 7 教室ツーウェイ 2003.5 : 基礎学力向上平均 90 以上の基本方針 20
- 8 白川 蓉子 (1986) : モンテッソーリ・メソッド入門 明治図書 124～128
- 9 令和 4 年版 あかねこかんじスキル 1 年上 光村教育図書
- 10 向山 洋一 (2009) : 今なら間に合う 取り戻せ! 教育力 産経新聞出版 64
- 11 西尾実編集代表 (1956) : 国語教育辞典 朝倉書店 154
- 12 松尾香弥子 (2004) : 空書の脳内メカニズム 風間書房 36

V 章

- 1 向山 洋一 (2006) : 全集 77 向山型国語＝暗唱・漢字文化・五色百人一首
- 2 李 軍 (2014) : 漢字文化を生かした漢字・語彙指導法の開発 早稲田大学出版部
- 3 向山 洋一 (1999) : 向山 洋一氏の授業記録「漢字文化の授業」教育トークライン 10 月号
- 4 向山 洋一 (2001) : 授業記録向山 洋一「漢字文化の授業」教育トークライン 7 月号
- 5 向山 洋一編 (2001) : 漢字文化をこう教える・第 5 学年 明治図書
- 6 15.3-4 向国教え方 : 国語授業＝向山型指導システム総覧 野口芳宏 47
- 7 海保博之編 (1984) : 漢字を科学する 有斐閣選書
- 8 下村 昇 (2003) : みんなの漢字教室 PHP 新書

VI 章

- 1 向山 洋一監修 (2020) : 全学年漢字まとめくん 騒人社
- 2 師尾喜代子 (1999) : 小学校の「漢字」を 5 時間で攻略する本 PHP 研究所
- 3 日本レクリエーション協会監修 (1989) : 遊びの大事典 東京書籍
- 4 教室ツーウェイ 1993.1 : クロスワードパズルで教科書のまとめ
- 5 鍛える国語教室 1996.2 : 漢字の習得力を鍛える

VII 章

- 1 向山 洋一 (1997) : 年齢別実践記録集第 1 巻「教育実習を終え新卒教師へ」170～172
- 2 向山 洋一 (2002) : 全集 35 子どもが熱中する向山型漢字・言語指導 112～117
- 3 大村はま (1981) : やさしい漢字教室 共文社
- 4 木村重夫 (2005) : 国語科で「難問一問選択システム」は可能か 箱根合宿論文
- 5 向山 洋一 (1997) : 小学 1 年～6 年 学級経営 学芸みらい社
- 6 松藤司編著 (2002) : 向山型国語入門 Q&A 小事典 明治図書
- 7 教室ツーウェイ 2001.7 : 基礎学力は「すぐれた学習モデル」によってこそ保障される
- 8 向山 洋一 (1997) : 年齢別実践記録集第 10 巻 32 歳 6 年エトセトラ
- 9 国語教育研究所編 (1973) : 漢字の読み書き分離学習 明治図書
- 10 倉沢栄吉 (1953) : 漢字と国語教育 文化庁国語シリーズ 198～199
- 11 野口芳宏 (1990) : 鍛える国語教室 5 言語事項の指導と教育評価 明治図書 105
- 12 堀田龍也 (2022) : 「「熱中軸」とは何か」 教育トークライン 9 月号 15